

「近代によみがえる古代神話」

(日本美術編)

樋田豊次郎

2020年度の館長講座のテーマは「神話」です。これを選んだのは、2019年度のテーマだった「アール・デコ」に、ギリシャ神話の神々が出没していたからです。アール・デコといえば、機械時代の芸術のはずなのに、なぜそこに古代の神々、とくに女神が居残っていたのか不思議でした。調べてみると、日本美術でも同じような現象が起きていました。

そこで古代神話の神々が、近代以降の芸術家の灵感源となりえた理由を知りたくなりました。女神たちの復活は、芸術家個人の出来事だったのでしょうか。それとも近代社会の主人公である市民階級（ブルジョワジーたち）や、その後の私たちにとっても必要なことだったのでしょうか。これらを考えてみようと思います。まずは日本美術の方から。

第1回：2020年10月21日（水） 14:30～16:00

想像の国民文化

本田錦吉郎、山本芳翠、青木繁の洋画

古事記と日本書紀と民間信仰に登場する、神々と英雄たち

第2回：2020年12月2日（水） 14:30～16:00

民間信仰 1

月岡芳年と国芳の錦絵

民間信仰に登場する、神々と英雄たちの冒険譚

第3回：2021年2月3日（水） 14:30～16:00

民間信仰 2

ナセル・ハリリが蒐集した金工品と漆工品

古事記と日本書紀に登場する神々、英雄譚、そして古代中国の神々

第1回 想像の国民文化

概要

仏教説話や民話には「説教臭」があるが、神話は荒唐無稽なだけだ。それで神話は、芸術家たちの灵感源となり、国民に愛された。

(1) 本田錦吉郎、山本芳翠、青木繁の洋画：主題は、古事記と日本書紀と民間信仰に登場する神々と英雄たち

(2) ヨーロッパ神話の翻訳：フォンタネージ、ジェロームらの影響

(3) 明治浪漫主義の擡頭：1890年（M23）頃の日本美術界は、体制変革期だった

① 大日本帝国憲法の公布 1889（明治22）年2月11日

② 帝国議会の開設 1890（明治23）年11月29日

- ③臨時全国宝物取調局の設置 1888（明治21）年9月27日
- ④帝国博物館の設置 1889（明治22）年5月16日
- ⑤帝室技芸員制度の設置 1890（明治23）年10月

この時期に日本文学でも、“反伝統的”、“反制度的”表現のロマン主義が擡頭し、森鷗外の『舞姫』（1890）、島崎藤村の詩集『若菜集』（1897）、国木田独歩の『武蔵野』（1898）、与謝野晶子の歌集『みだれ髪』（1901）などが発表されている。

画像リスト

- ①本田錦吉郎（1850-1921）《羽衣天女》、1890（M23）、個人
 フォンタネージの《神女図》に類似（荒屋舗の研究）。フォンタネージは1876.11から78.9まで工部美術学校の教師に就く。本田は1872年に工部省測量司の見習い生徒となり、測量術を学ぶ。
- ②アントニオ・フォンタネージ（1818-82）《神女図（壁画画稿）》、木炭、赭
 チョーク、1876-78（M9-11）、千葉県美（浅井忠旧蔵）
 フォンタネージは帰国に際し作品を弟子たちに与えた（荒屋舗の研究）。
- ③アントニオ・フォンタネージ（1818-82）《天人図（壁画画稿）》、木炭、赭
 チョーク、1876-78（M9-11）、東京芸科大学美術館（高橋源吉旧蔵）
- ④原田直次郎（1863-99）《騎龍観音》、1890（M23）、護国寺
 原田は東京外国語学校でフランス語を学び、ミュンヘンのアカデミーに学ぶ。
 ロマン主義の影響を受ける（荒屋舗の研究）。
- ⑤山本芳翠（1893-95）《十二支の丑 織姫》、1892（M25）、三菱重工業株式会
 社長崎造船所、岩崎家の依頼で制作、4回明治美術会出品
 山本は美濃国明智町の生まれ。五姓田芳柳門下。1978年渡仏（1887年帰国）。
 パリでジェロームに師事。
 牽牛と織女の図。中国民間の星祭である「乞巧奠」が日本で七夕となった。
 留学中の師ジェロームが描く中近東の婦人像を思わせる（若松敏道の研究）。
 ジャン＝レオン・ジェローム（1824-1904）は、フランス学士院会員で、画家お
 よび彫刻家。
- ⑥ジャン＝レオン・ジェローム（1824-1904）《クレオパトラとシーザー》、1866、
 個人
- ⑦山本芳翠《十二支の酉 思兼神と常世の長鳴鳥》、1892（M25）、三菱重工業
 株式会社長崎造船所、4回明治美術会出品（岩崎家の依頼で制作）
 天岩戸を開かせるために、思兼神は常世の長鳴鳥を集めて一斉に鳴かせ、天
 宇受売命に踊らせた（若松敏道の研究）。
- ⑧山本芳翠（1893-95）《浦島図》、1893-95（M26-28）、岐阜県美術館、7回明
 治美術会出品
 「ネプトゥヌスの凱旋」の図像を典拠にしている。ネプトゥヌス（ポセイド
 ン）＝浦島太郎、妻の女神アンピトリテ＝乙姫、ネレイス＝随行の女人、トリ
 トン＝随行の童子（若松敏道の研究）。

- ⑨ マイセン 《ヒッポカンポスの引く凱旋車に乗るネプトゥヌス》、色絵磁器
- ⑩ 京都井上 《浦島》、蒔絵、1880（M13頃）、ハリリコレクション
- ⑪ 京都駒井 《浦島》、肥後象嵌、1890年代（M23-32）、ハリリコレクション
- ⑫ 青木繁（1882-1911）《輪転》、1903（M36）、油彩、アーティゾン美術館
 青木は福岡県久留米市で生まれる。小山正太郎の画塾「不同舎」に入る。東京美術学校西洋画科選科で、黒田清輝に学ぶ。1904年同校を卒業し、坂本繁二郎、森田恒友、福田たねと4人で布良に1ヶ月半滞在する。その後、28才で早世。《輪転》の主題は不詳。
- ⑬ 青木繁（1882-1911）《黄泉比良坂^{よもつひらさか}》、色鉛筆、パステル、水彩、紙、1903（M36）、東京芸大大学美術館
 主題は、『古事記』上巻（神代巻）より。イザナギが妻のイザナミを黄泉国^{よみのくに}に訪ねるが、逃げ帰る話。
- ⑭ 青木繁（1882-1911）《天平時代》、1904（M37）、油彩、アーティゾン美術館
 藤島武二の《天平の面影》（1902、7回白馬会）に触発されて描く。西洋の象徴派の影響。
- ⑮ 青木繁（1882-1911）《大穴牟知命^{おほなむちのみこと}》、1905（M38）、油彩、アーティゾン美術館、10回白馬会？
 主題は、『古事記』上巻（神代巻）の、大穴牟知命（大国主命）の物語より。大穴牟知命は兄弟の神々に騙され、焼けた石をつかまされて焼け死んだ。母神の願いを聞いて、カミムスビノカミが蛸貝比売^{きさがいひめ}と蛤貝比売^{うむぎひめ}を遣わし、蛸貝比売が貝殻を削って粉を集め、蛤貝比売がその粉を溶かして母の乳汁のようにして、大穴牟知命の体に塗りつけて生き返らせた話。画面左から、蛸貝比売、大穴牟知命、蛤貝比売。
- ⑯ 青木繁（1882-1911）《光明皇后^{こうみょうこうごう}》、1906（M39）、油彩、アーティゾン美術館
 登場人物は、光明皇后と聖武天皇と言われている。
- ⑰ 青木繁（1882-1911）《旧約聖書物語挿絵 紅海のモーゼ》、油彩、板、1906（M39）、ニューオーサカホテル
- ⑱ 青木繁（1882-1911）《日本武尊^{やまとたけるのみこと}》、1906（M39）、油彩、東京国立博物館
 主題は、走水に入水した妻の弟橘比売^{おとたちばなひめ}を思い、日本武尊が「あずまはや」と三回嘆息した話。日本武尊の相貌は、青木の自画像だと伝えられる。
- ⑲ 青木繁（1882-1911）《わだつみのいろこの宮》、油彩、1907（M40）、アーティゾン美術館、東京府勧業博覧会出品、三等賞受賞。
 主題は、『古事記』上巻（神代巻）の、綿津見の宮物語より。兄の海幸彦から借りた釣針をなくした山幸彦が、海底の「魚鱗のごとく造れる」宮殿に行き、豊玉毘売^{とよたまひめ}（左側）とその侍女に出会う話。